

## 第4節 讃岐における古墳出現の背景

### —東四国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察—

#### 1. はじめに

本章第2節において指摘したように、本遺跡より出土した甕Cをはじめとする一群の土器は、本地域の古墳時代前期の土器様相を理解する上で、非常に重要な位置を占めるものと考えられる。以下では、この甕を中心に本地域の主に古墳時代前期の土器様相について、若干の考察を加えることとする。

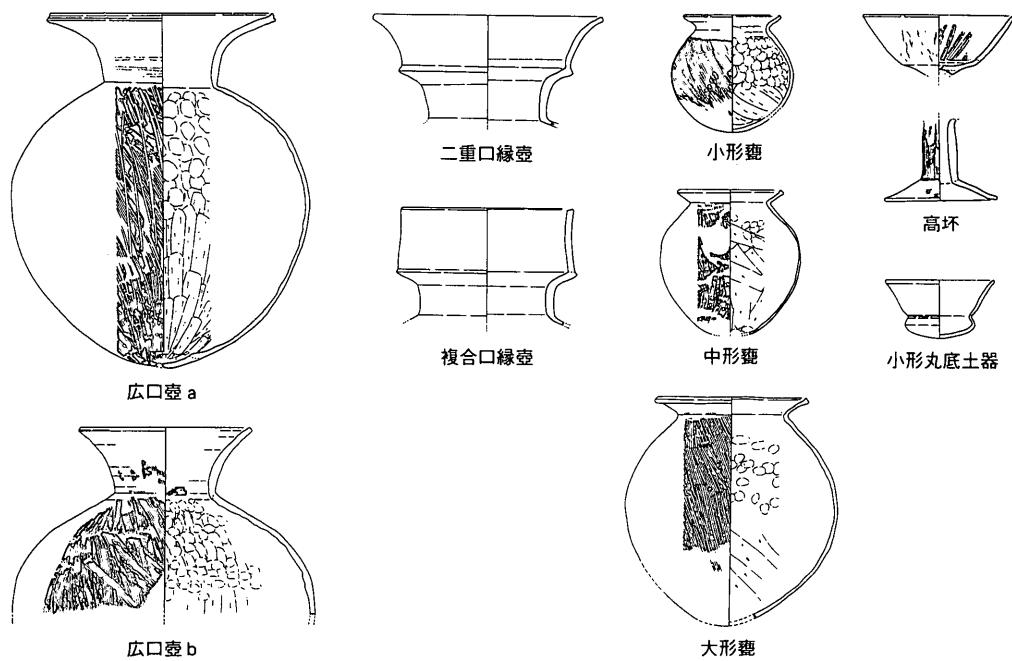
なお、甕C及びその系譜上にある甕形態については、かつて木下晴一氏が「菅原康夫氏が設定する「東阿波型土器」と形態・調整技法が酷似する」ことを指摘（木下1995）し、また大久保徹也氏も阿波東部地域の影響を想定する（大久保1993）。しかし、私は阿波東部地域のみからの一元的な影響関係を想定するのではなく、多元的でかつ自律的な動きとして、Ⅲ期段階での本甕Cの成立背景を理解しようと考えている。詳細は以下本文に委ねるが、本稿での目的は定型化した甕Cを「東四国系甕」と称し、また甕Cに特徴付けられる一群の土器群を「東四国系土器群」と称することの提唱にある<sup>(1)</sup>。

#### 2. 東四国系土器群の器種組成

まず、以下に東四国系土器群を検討するに際して、その器種組成を整理することから始めよう。

東四国系土器群について、現在確認できる主要な器種に、広口壺2種、二重口縁壺、複合口縁壺、甕、高壺、小型丸底土器がある。しかし、これら各器種が、一定量セット関係を有して安定して出土した遺跡の報告例は乏しく、普遍的な器種組成として把握できるのかどうかやや疑問が残る。その要因として、当該期の調査された良好な遺跡数の僅少さもさることながら、その成立当初においては各地域単位での特定遺跡（集団）での集中製作の可能性<sup>(2)</sup>も否定できず、その出土傾向に一定の偏差が生じた可能性も想定される。器種組成の詳細については、今少し調査例の増加を待って判断したい。

また、これにおそらく在地系譜の壺・甕類や大・中・小の各鉢類等が加わって、各地域単位での器種のセット関係を構成するが、これら甕・鉢類は東四国系土器群のみに普遍的



第290図 東四国系土器群主要器種

に現れる器形ではなく、形態や調整手法等に若干の地域色も認められるため、一応東四国系土器群からは除外しておく。以下、各器種の系譜関係を交えながら、形態の特徴を概説しよう。なお、甕については次項で検討を行うため、ここでは省略する。

広口壺は、頸部が外傾ないしは直立し、やや強く折り返して大きく外反して開く口縁部を有する広口壺aと、明確な頸部を有さず基部より緩やかに外反して開く広口壺bの2者がある。

広口壺aは、B類土器群以外の在地の広口壺の系譜上に位置付けられる。口縁端部形状は若干のバリエーションが認められ、時期や地域により複雑な様相を呈する。体部は、球形ないしは倒卵形を呈し、底部は丸底化する。内外面の調整手法は甕等のそれと共に通し、在地の伝統的製作手法を継承する。

広口壺bは遅くともIV期には出現するとみられるが、その系譜については明確ではない。少なくとも在地の土器に、その直接的な系譜関係を求めるることは困難である。畿内系直口壺C（寺沢1986）に類似した口頸部形態を認めるが、その系譜関係については、資料数が乏しく充分な検討を加えるまでには至っていない。体部は球形化が進展しており、内面上半部には本地域の壺・甕のそれに共通するケズリ調整後の指圧痕が明瞭に認められ、広口

壺 a 同様に伝統的成形手法に則って製作される。

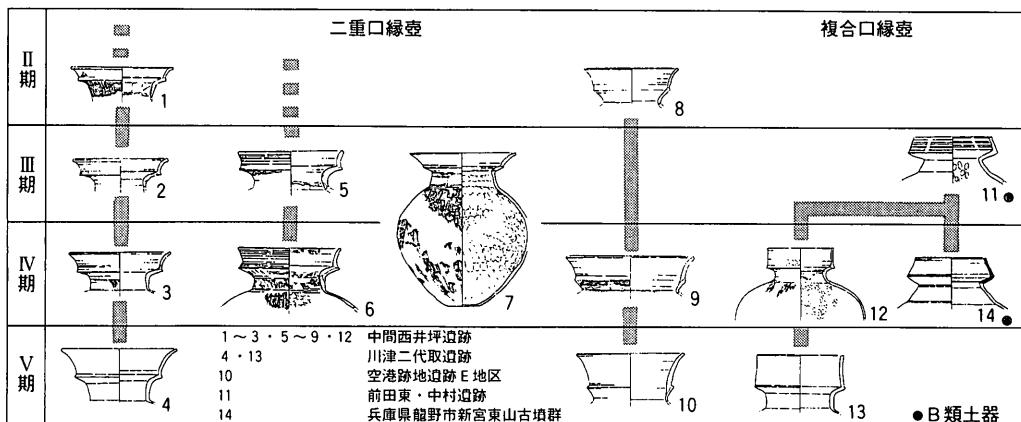
二重口縁壺は、畿内系のそれとは異なり、頸部は内傾ないしは直立して立ち上がり、一次口縁部への屈曲部内面は鈍く丸味を帯びる。二次口縁は直立気味に外反して開き、大きくは発達しない。一次口縁端部を強く斜下方へ摘み出す点に、特徴を認める。体部形状は、広口壺のそれと大きくは異ならない。弥生終末期段階までは確実に本地域に系譜を求めることができるが、それ以前の様相については、断片的な資料しかなく明確ではない。少なくとも B 類土器群には存在しない器種であり、B 類土器以外の在地土器に系譜を求める。

複合口縁壺は、直立ないしはやや内傾する二次口縁に特徴を認める。頸部より一次口縁にかけての形態は、上記二重口縁壺のそれに類似する。頸部は、直立ないしはやや内傾して立ち上がり、強く折り返して 1 次口縁は短く開く。二次口縁は直立して長く伸び、外面への装飾は乏しい。端部を主に内側に肥厚する点は、B 類複合口縁壺のそれに共通する。また、一次口縁端部を強く外方へ摘み出す手法は、上記二重口縁壺のそれと共に通し、B 類複合口縁壺にも同手法を認める。基本的には B 類複合口縁壺に直接的な系譜関係を有しつつ、上記二重口縁壺の影響下に成立した可能性を考えている。IV 期段階には定型化するとみられ、B 類複合口縁壺と時期的に一部併存する<sup>(3)</sup>。体部が完存する資料に乏しいが、当該期には球形化が進展しているようである。B 類土器では大型品に限定されたが、本土器群では中形品も出現する。

高壺は、小形品に限られる。内湾ないしは直線的に大きく開く壺上半部に対して、壺下半部は平板的で小さなものとなる。口径に比して壺部深は深い。壺上半部内面には特徴的な放射状のミガキ調整を認める。脚部は、円柱状の細身の軸部と強く屈曲して開く小さな裾部からなる。軸部内面はケズリ調整され、外面は縦ハケ調整が一般的である。壺部と脚部の接合は、いわゆる接合法による。形態のみならず、内外面の調整手法や脚部との接合など基本的な点で、畿内系の高壺 A (一瀬1989) の影響を色濃く認める。在地の高壺に直接的な系譜関係を求ることは困難で、III～IV 期に唐突に本地域に出現し拡散する点も、他地域系土器の移入とした方が理解しやすい。本土器群の中で唯一、他地域に直接的な系譜が求められる確実な器種である。

小形丸底土器は、下川津 B 類土器を含めた本地域の小型丸底土器に直接的系譜を求める。しかし、III～IV 期段階の資料数に乏しく、その成立の経緯については必ずしも明確ではない。

以上より、複合口縁壺と小形丸底土器は B 類土器を含めた在地の土器に、広口壺 a と二



第291図 二重口縁壺・複合口縁壺の主要系譜（縮尺不同）

重口縁壺はB類土器以外の在地の土器に、高坏は畿内地域にそれぞれ直接的な系譜を求められることが明らかとなった。なお、広口壺は畿内系の影響を認めるがなお不明な点が多く、また甕は後述するようにB類土器に主に系譜を求める。つまり、東四国系土器群はある特定地域の土器組成の単純な型式変化の上に成立した土器群（様式）ではなく、B類土器を含めた複数地域の個別器種の集合体といった感が強い。こうした点に、東四国系土器群が成立した背景の実態が、よく反映されていると考える。

### 3. 東四国系甕の系譜関係

東四国系土器群の評価を行うに際しては、まず個別各器種についてその系譜関係を整理し、位置付けを明確にする必要がある。しかし、筆者の力量不足から、上記したように充分な評価を行うことは未だ困難である。したがってここでは、最も主要でかつ普遍的な器種である甕について、その系譜関係を整理することから始めよう。なお、後述するように、私は東阿波型甕（この場合は近藤編年のⅢ-3期の甕形態を指す）を、東四国系甕のバリエーションの一つとして捉えている。東阿波型甕あるいは讃岐地域で出土する同種甕の従来の評価とは、この点で大きく異なる。

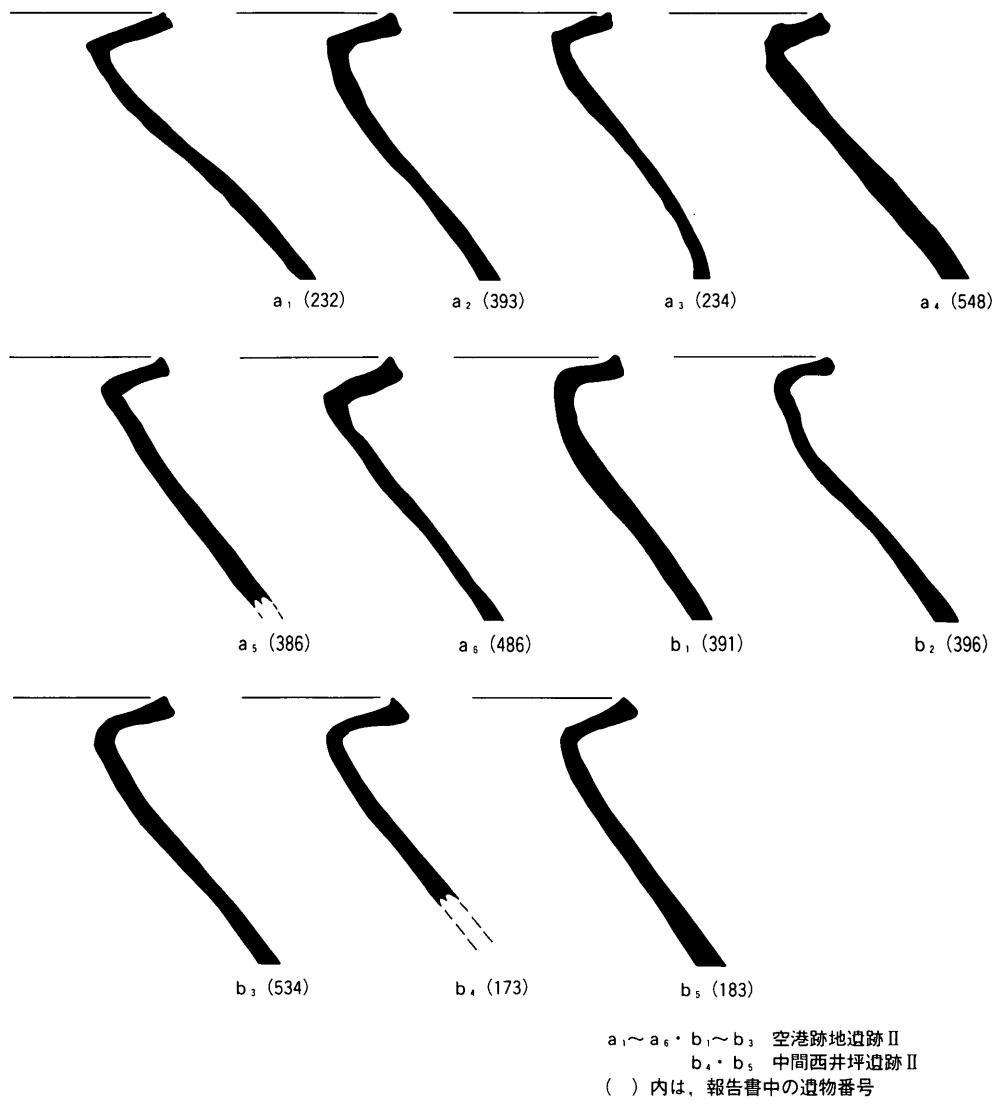
さて、東阿波型甕の定義として近藤玲氏は、「胎土に結晶片岩を含むこと」と、「壺と甕の体部の形状に特徴があり、肩のあまり張らない倒卵形を呈し、他地域に搬入されてもわりと簡単にみわけられる」点を指摘する（近藤1996）。胎土の差異は、土器製作時における粘土採取地の差異を反映し、特徴的な岩石・鉱物の含有は極めて限定された製作地の存在を示唆するものではあるが、型式学的な意味において甕形態を規定するものではない。

体部が倒卵形を呈することが主要な形態的特徴となるが、それが東阿波型甕に限られたものかどうかは不詳である。

近藤氏は、上記したことをもって氏の編年案の後期Ⅲ－2期に、東阿波型甕の成立を想定する。当該期は前掲した私案の編年案のⅡ期に概ね併行し、讃岐において定型化した甕Cは未だ成立していないと考えている。一方、当該期の東阿波型とされる甕形態は、体部形状や内外面の調整手法（例えば、およそ倒卵形とは呼べない体部形状や肩部外面の左下がりのハケ調整）等に、後述する定型化した東四国系甕と比較して強い違和感を覚える。確かに後出形態への連続性は首肯されるが、一方で直前型式の後期Ⅲ－1期への系統関係については、両者間に型式的な格差が大きく、直接的な系統関係を想定することは困難であろう。したがって、Ⅲ－2期における画期は今のところ評価が困難で、讃岐地域での甕の動向を考慮するなら、Ⅲ－3期における画期こそ重視されるべきと考える。実際、近藤氏も指摘するように、「もっとも多く東阿波型土器が搬出されるのは、後期Ⅲ－3期」であることは、安定した同種甕の製作が当該期に下る可能性を示すものとも受け取れる。

私は、近藤編年の後期Ⅲ－2期において、東阿波型甕と称されるある種甕形態が成立することを否定するつもりはない。私が強調したいのは、私案の時期区分のⅢ期に讃岐と阿波の一定地域における甕形態の齊一化現象である。

さて、東四国系甕の系譜関係に話を戻そう。再度繰り返しにはなるが、その型式的特徴について記しておく。法量は、内容量11程度の小形甕と、同31程度の中形甕と、同51程度の大型甕の3形態に分かれる。法量による、器形や内外面の調整手法の差異は明瞭ではない。口頸部は強く折り返して外反して開く。口縁部は端部を中心にかなりのバリエーションを認める。これらは系統差よりもむしろ時期的な差異として理解されるが、異なる端部形態を有する甕が共存することもあり、厳密に時期を区分できるものでもない。頸部内面は丸くナデ付けられ、辛うじて鈍い稜を認める。体部は倒卵形を呈し、若干肩部に張りを認める。体部の成形は粘土紐巻き上げによるとみられ、稀に粘土紐の接合痕が観察される個体もある。体部外面はタタキ調整の後、丁寧な右下がりのハケ調整によってタタキ痕は消し去られる。ハケ上端は、頸部のヨコナデ調整によりナデ消される。体部内面は左上がりのケズリ調整の後、上半部は指頭圧痕やナデ調整される。頸部直下には口縁部より連続するヨコナデ調整が一般的である。内底面には、若干の指圧痕を認めるが、これは本章2節でも述べたように、外底面の調整時に付されたものと考えられる。底部は丸底。



第292図 終末期B類甕の口頸部形態分類 (1/2)

外底面にナデ調整を加えるものもあるが、一般にはハケ調整と思われる。

さて、上記した東四国系甕の系譜はどこに求められるであろうか。私は、法量差による3形態の存在や体部内外面の成形・調整手法を重視して、やはり下川津B類甕にその直接的な系譜を求めておきたい。また、最も差異の大きいと考えられてきた口頸部形態についても、第292図に示すように、終末期のある種のB類甕には、頸部内面の稜が鈍く、口縁部は外反しつつやや長く伸び、端部を内上方へ摘み上げる (b<sub>3</sub>～b<sub>5</sub>類) 形態が出現する。これらの形態は、それまでのB類甕の口頸部形態の基本的な形式変化の延長上に成立

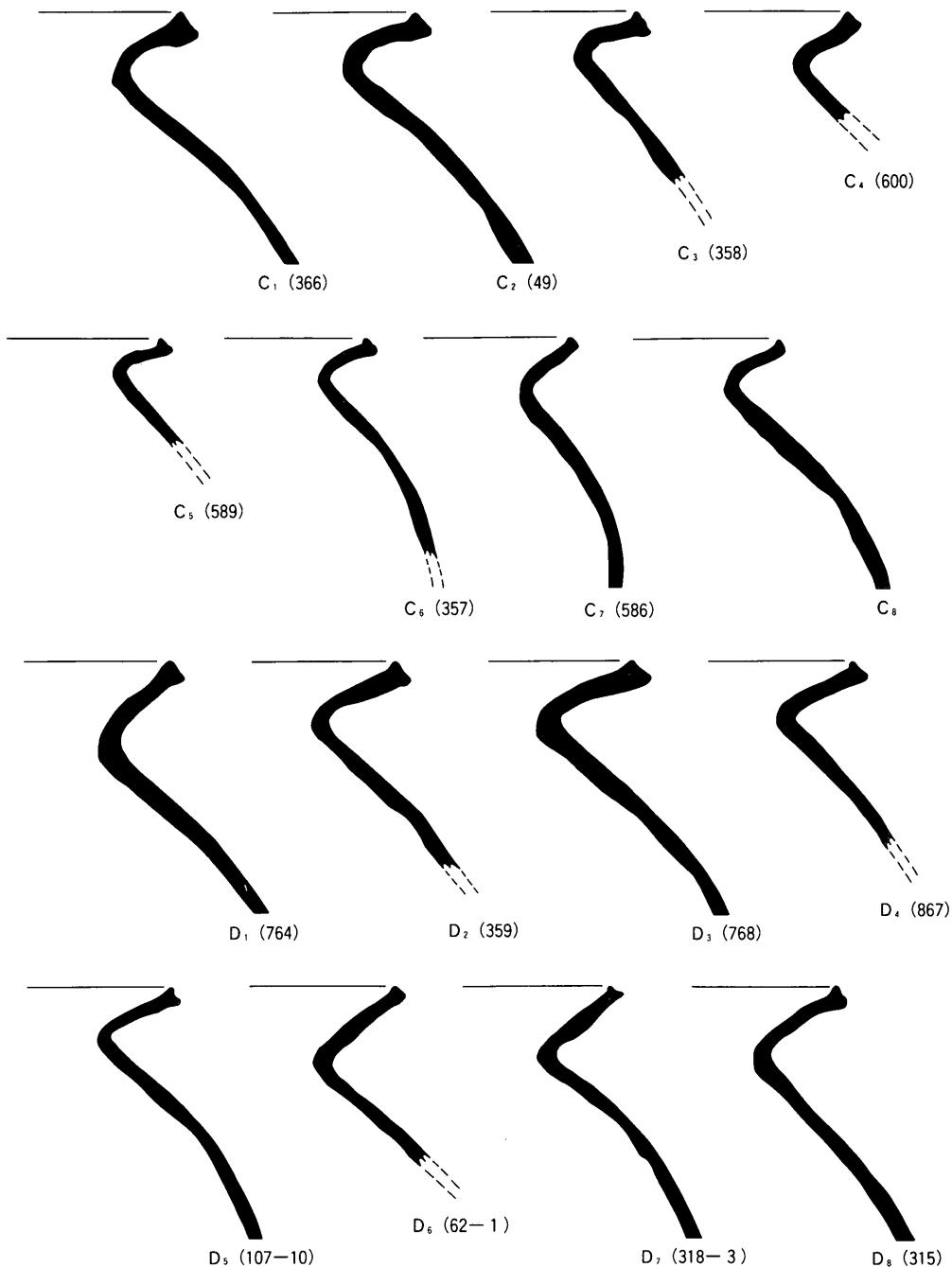
する b 1・2 類とは異なり、口縁部の延伸と端部のシャープな摘み上げに大きな特徴を有しており、おそらく口頸部の製作手法はその末期に至って大きく 2 系統に分解する可能性が高い。後者の極めて特徴的な口頸部形態は、第293図に示す東四国系甕の口頸部形態の c 2 及び d 2・3 類と明確な系譜関係が想定され、その直前に位置付けられるものと考える。

しかし、体部外面のハケ調整、特に東四国系甕肩部の右下がりのハケ調整は、B 類甕が終末に至るまで頑なにこの部分へは左下がりのハケ調整を墨守することから、直接的な系譜は想定できない。一方、黒谷川郡頭遺跡 S B 304 や S B 306 (菅原ほか1989) 出土資料の甕の肩部外面には、右下がりのハケ調整で、B 類甕からの系譜が想定可能な左下がりのハケ調整を消去しようとする動きが看取される。この右下がりのハケ調整の卓越化の終着に、東四国系甕が存在すると考える。後の東四国系甕成立に至る要素の一部が、弥生終末期の阿波地域において既に準備されつつあった状況が窺える。また、東四国系甕の体下半部外面には、B 類甕に通有のミガキ調整は認められない。こうした体部外面の調整手法には、阿波地域の一定程度の影響を想定しておきたい。

一方、IV 期の東四国系甕における体部の球 (倒卵) 形化や底部丸底化、及び口縁部の伸張は、B 類甕の自立的な型式変化からはその方向性を認識し難いものがある。例えば終末期の B 類甕は、肩部の張りを消失し体部最大径の位置が下がり球形化を一定程度指向はするが、底部形状は頑なに平底を踏襲する。東四国系甕に類似した体・口縁部形状を他地域の土器に求めるなら、古式の布留系甕にその可能性を認める。東四国系甕の一部に、口縁部が内湾傾向を示すものが存在することや、布留系甕の体部外面に右下がりのハケ調整が施されていることも、布留系の影響を想定する傍証の一つとなりうるだろう。

つまり、東四国系甕は下川津 B 類甕を直接的な母体としつつも、その自立的な変化とともに、阿波や畿内地域の一定程度の影響を受けつつ成立したと理解したい。模式図的に示せば、第294図に示される関係になる。なお布留系甕の影響は、東四国系甕の成立にやや遅れる可能性を想定しているが、成立期の布留系甕との併行関係については明確さを欠くため、暫定的な考え方でしかない。

上記した私案は、同種甕を東阿波型甕の模倣形態もしくはその影響下に成立した形態とする従来の認識とは大きく相違する。その根本的な要因は、上記したように東阿波型甕そのものの認識の相違と共に、阿波地域の土器製作の評価に起因する。菅原氏が説かれるように (菅原1992 a)，弥生時代後期後半段階に、B 類甕が一定程度阿波地域の甕形態に影



C<sub>1</sub>～C<sub>4</sub>, D<sub>1</sub>～D<sub>4</sub> 中間西井坪遺跡Ⅱ

C<sub>5</sub> 高松市茶臼山古墳

D<sub>5</sub> 稲木遺跡

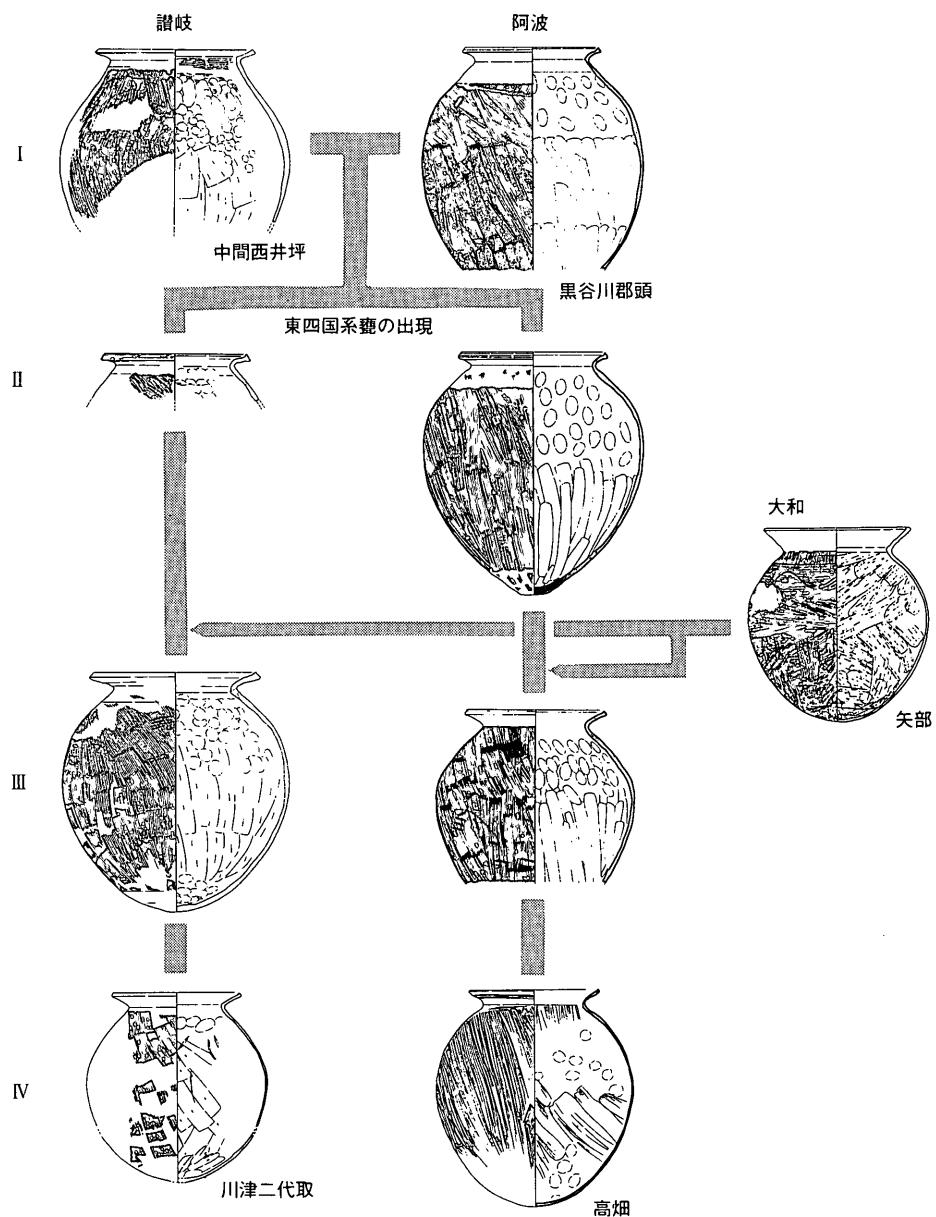
D<sub>6</sub> 仲村廃寺

D<sub>7</sub> 一の谷遺跡群

D<sub>8</sub> 川津二代取遺跡

( ) 内は、報告書中の遺物番号

第293図 東四国系甕の口頸部形態分類 (1 / 2)



第294図 東四国系甕の主要系譜

響を及ぼしたことは確実であろう。それによって阿波独自の甕形態が成立した可能性も認める。しかしそれは、B類甕からの一方的なものであり、阿波地域からの相互方向的な影響の痕跡は、当該期のB類甕には認められない。したがって、少なくとも同種甕の製作においては、当時の阿波地域の主体性を大きく評価することは困難と考えられ、東四国系甕成立時に一定程度の影響の可能性は認めるが、甕形態そのものの変革を促すような、その

波及効果を阿波東部地域内部のみに期待することはできない。

現在古式の東四国系甕が出土している遺跡は、一の谷遺跡群、延命遺跡、仲村廃寺、稻木遺跡、三条番ノ原遺跡、下川津遺跡、中間西井坪遺跡、空港跡地遺跡、前田東・中村遺跡、森広遺跡がある<sup>(4)</sup>。丸亀平野西部、丸亀平野東部、高松平野周辺、長尾平野周辺では、同種甕の胎土は各々相違しており、各地域単位で製作された可能性が高い。確かに遺跡単位によってその出土量に明確な多寡は認められるが、各地域単位での製作の可能性を考慮すれば、同種甕は成立当初より三豊地域を除く讃岐各地域において一定程度の普遍化を達成していると考えてよいだろう。さらに、東四国系甕の分布域は、概ね前節で検討を行ったB類土器共有圏のエリアと合致しており、B類土器群から東四国系土器群への移行が、前者を否定した上に成立するのではなく、緩やかに継承しつつも、本質的な部分では大きな変革の上になされたことを推測させる。この点は、東四国系甕の成立を考える上で、非常に重要な意味を有していよう。

また菅原氏が、同種甕の製作地を吉野川下流南岸の鮎喰川流域に求める点も重要である。讃岐においては、上記のように各地域単位での製作の可能性が想定されるが、阿波においても同様に、製作地が一定程度限定される可能性が高い。しかし、その実体については未だ不明な部分が多く、讃岐地域と同列に位置付けることは困難である。阿波地域において同種甕の製作地論については、まだ議論の余地を残していると考える。

以上のように、東四国系甕の系譜関係について整理を行った。しかし、阿波東部地域の様相が今一つ不明瞭なため、讃岐地域との関係を含めて、議論を深化させることが十分ではない。今後、阿波地域の様相が明らかになれば、上記した私案の修正の余地も生じてこよう。

#### 4. 東四国系甕成立の背景

上記したように、東四国系甕は下川津B類甕を母体としつつ、それに阿波東部地域と布留系甕の製作技術を取り込みながら成立したものと考えた。また、東四国系土器群については、阿波・讃岐地域の在地の器種の他、一部畿内地域の系統を選択的に取り込んで成立したものと考えられた。では、このような複雑な展開を経ながら成立に至った東四国系甕あるいは東四国系土器群には、どのような背景が想定されるのであろうか。

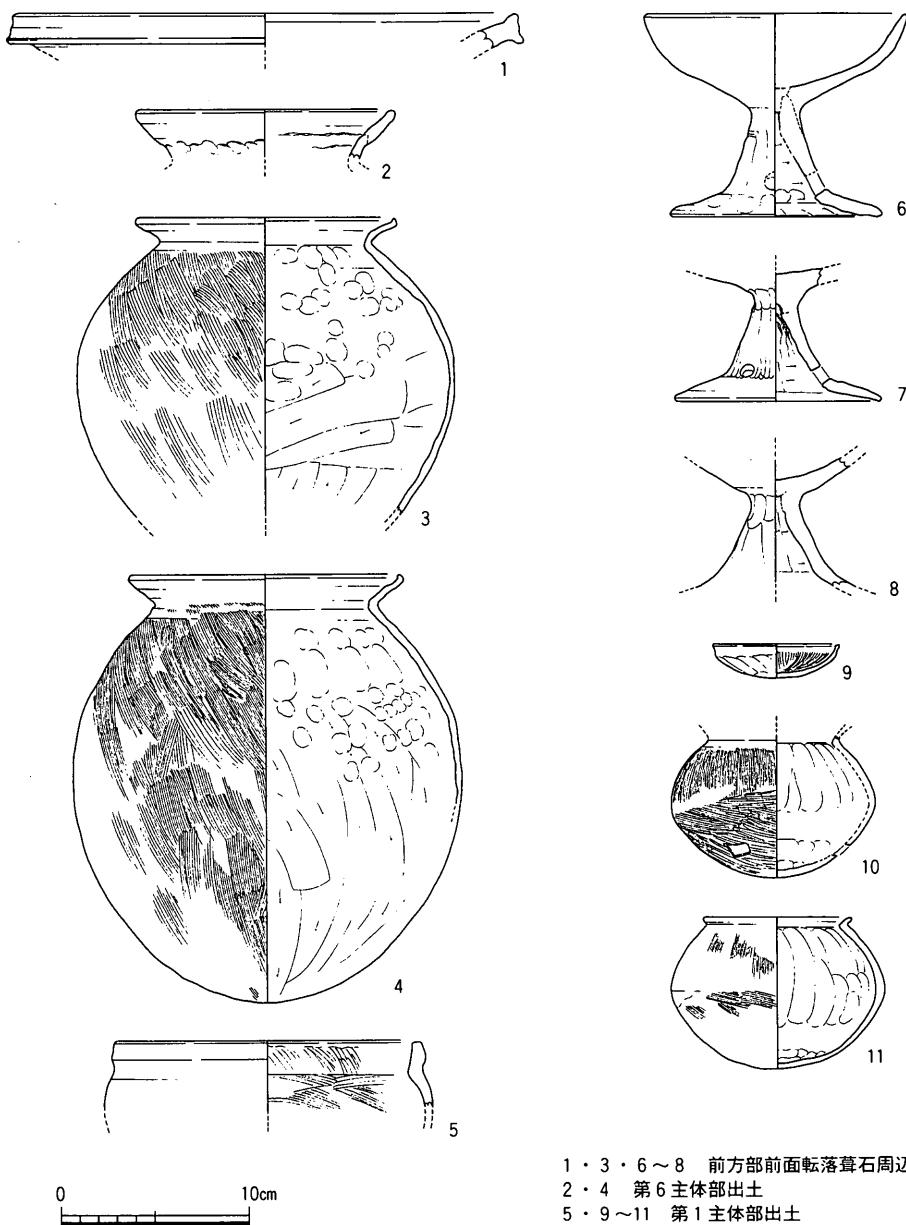
前節において、B類土器群の拡散現象の衰退の背景として、広域的な集団関係の再編・変質と、その集団を表象する必須のアイテムとしてB類土器をシンボル化することの限界

性に、その直接的要因を求め、さらにB類土器様式に代わる新たな土器様式の創出が必要とされたことを想定した。つまり、東四国系土器群がまさにそうした新たな土器様式に他ならない。ここでいう大きな政治的変動とは、都出比呂志氏が説かれる前方後円墳体制(都出1991)の成立であり、古墳時代の開始を意味する。東四国系土器群の創出は、こうした集団関係の再編に即応した動きとして理解される。

東四国系土器群では、胎土の特殊性はもちろん、製作技術上の保守性やミガキ調整の多用にみられる装飾性や技巧上の精緻さは一定程度消失し、画一化されたよりシンプルな機能性のみが追求された。これらはB類土器に代表される著しい小地域色の衰退を意味し、つまりは在地の土器様式の伝統性を突き破る胎動となって、新たな社会構造の創出へと結び付くものと考える。

その伏線は弥生後期段階に遡る。ほぼ一方的とも言えるB類土器の阿波への流入とその製作技術の伝播は、阿波・讃岐における土器様式の共通した基盤を醸成し、東四国系土器群成立への内在的な規定的要因となったものと考える。そして、こうした共通した規範の共有（それは土器様式のみならず、住居構造や墳墓祭祀にも認められる）を基礎として、弥生時代終末期における新たな政治システムの波及により、讃岐・阿波両地域の諸集団間の上部構造の再編・淘汰が推進されたと考えたい。それを、阿讃連合体と呼称する。なお、土器様式の大きな転換点を、東四国系土器群の成立に求める。つまりそこには、時間軸上での連続する単系譜的な土器型式の変化ではなく、画期となる土器製作者の強い意志を読みとることができると考えるからであり、東四国系土器群を本地域の古墳時代の土器様式として評価したい。

そして、その具体的契機となったのは、やはり弥生時代終末期前半における萩原1号墳(菅原ほか1983)の築造に象徴されると考える。積み石による墳丘の構築、後円部を丘陵下方に設定し、極めて低平な前方部形態と、後円部の造作に主眼をおいた築造規格、後円部における複数段の石積段築、墳丘主軸に斜行し東西方位を採用する埋葬施設、墳丘へのB類土器の供獻、埋葬施設における特殊な構築墓擴壁の採用など、多様な面で讃岐地域との強い親縁性(蔵本1997)が認められるからである。「阿波物流拠点域への橋頭堡」(菅原1992a)となるかどうかは疑問だが、その築造に讃岐集団が大きく関与したことは疑え得ない。こうした構築技術や祭祀的演出は、画一化された祭祀専用土器の出現とその多量供獻や多重の階段状列石など、より整備された内容で讃岐中枢部で完成される。つまり、鶴尾神社4号墳の築造である



第295図 高松茶臼山古墳出土土器 (1/4)

上記した前方後円墳の諸属性は、後の東部四国地域の前方後円墳にやや変質を伴いながらも継受され、本地域の前方後円墳様式において地域色を顕在化する要因となる（藏本1995）。そして、こうした前方後円墳への供献土器として、ようやく東四国系土器群が用意されるのである。なお鶴尾神社4号墳へのB類土器諸器種の供献は、それが未だ弥生墓的な様相を多分に残存したものであった点を象徴すると考える。

現在、東四国系土器群の前期古墳への供献例として、奥14号墳（二重口縁壺）、丸井古墳（広口壺・甕）、稻荷山古墳（広口壺）、高松茶臼山古墳（広口壺・甕）<sup>(5)</sup>、姫塚古墳（広口壺）、石清尾山石舟塚古墳（広口壺）、六ツ目古墳（広口壺）、野田の院古墳（甕）<sup>(6)</sup>等がある。古墳によって供献される器種にやや偏りがみられ、在地での伝統性もしくは被葬者の主体的な選択が働いたとみられる。

さて、畿内地域の弥生終末期の庄内系甕の分布に目を転じると、畿内にあっても庄内甕の分布は著しい遍在性を示し、製作域に近接する和泉・東摂・西摂東部でさえ20%前後の浸透度を示すに過ぎない（森岡1991）。庄内形甕にもB類甕同様の地域アイデンティティを強調する象徴性が付与されており、その共有には一定の制約がともなったのであろう。こうした地域的枠組みを打破する胎動として、布留系甕の創出を位置付けるのであれば、その象徴性や政治性とは比肩すべくもないが、類似した背景を宿した土器として東四国系甕を位置付けることも可能ではなかろうか。

## 5. 各地域の外来系土器の様相

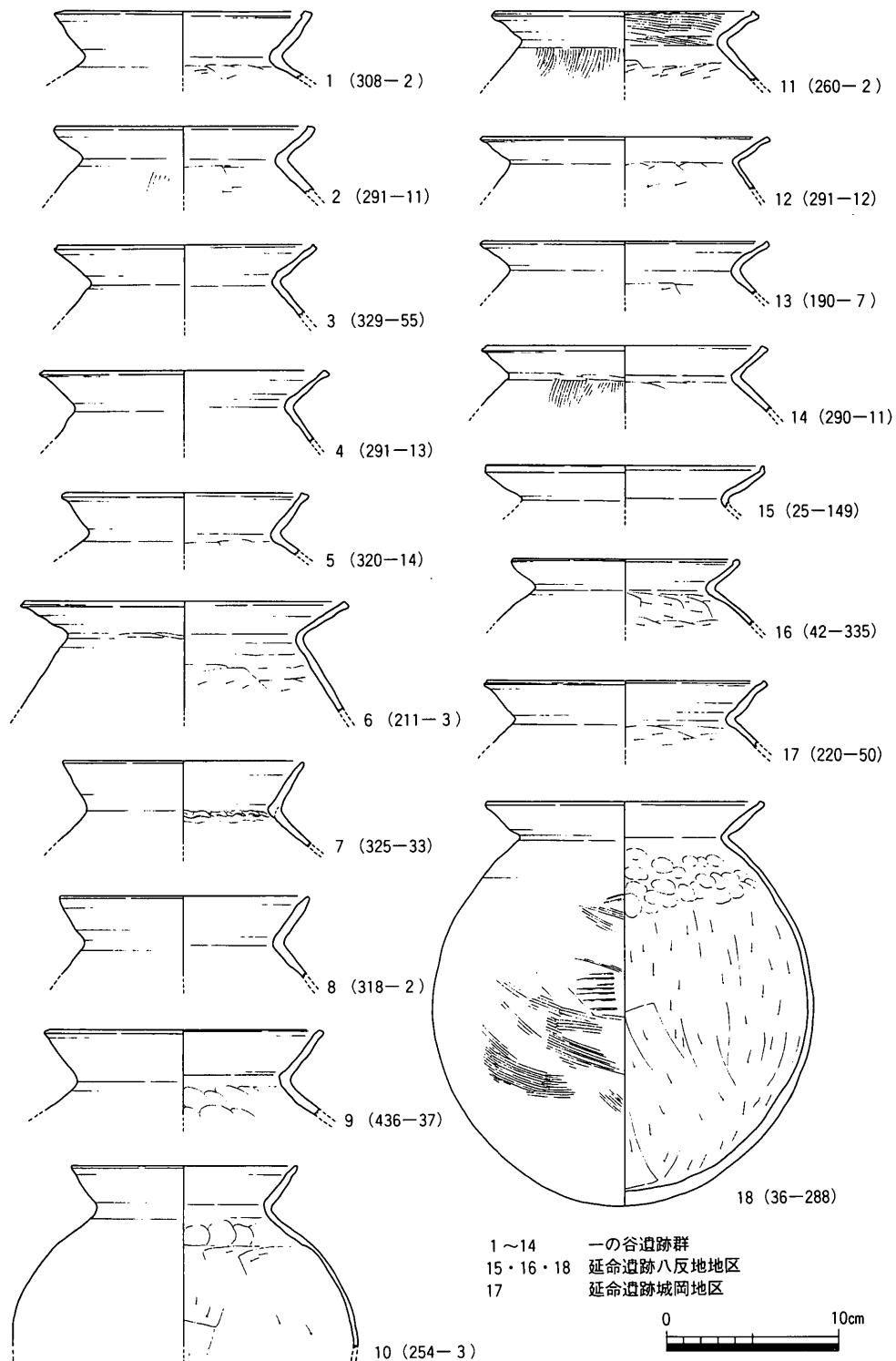
以下では、具体的に讃岐各地域において、東四国系甕を中心に当該期の土器様相、特に他地域からの搬入土器やその模倣形態に注目して若干の整理を行い、東四国系甕の在り方を検討する一助としよう。

### 三豊地域

延命遺跡と一の谷遺跡群が当該期のまとまった資料を提供している。いずれも、Ⅲ期あるいはそれ以前に遡る若干の夾雜物を伴うが、Ⅳ期以降の良好な資料が提示される。

東四国系甕の報告例は極めて乏しい。確實なものは、一の谷遺跡で2個体（254-2, 320-13：括弧内は報告書の遺物番号を示す、以下同じ）、延命遺跡で1個体（293）があるのみである。いずれも胎土の点から搬入品の可能性が高く、遺跡周辺で製作されたものではない。前節で検討したB類甕と同様な出土傾向を示している。

東四国系甕の僅少さに対して、古式の布留系甕は後述する他地域と比較して出土量が著しく多い。一の谷遺跡群では14個体以上（第296図）が、延命遺跡でも6個体以上（第296・297図）が報告されている。しかし、形態や調整手法の点で典型的な布留系甕と違和感が強く、古式布留系甕に特徴的な肩部施文を一切欠落し、同時に胎土の面からも、ほぼすべて在地での模倣形態であることは疑えない。また、口縁部形態はバリエーションに富み、



第296図 香川県内出土古式布留系甕 1  
 (各報告書より再トレース・一部改変、括弧内は報告書番号)

その立ち上がり角度も概ね90° 前後に集中はするが、81～106° と誤差は大きく、矢部遺跡での計測値（寺沢1986）とズレがみられることも、模倣形態であることを傍証しよう。その他、畿内系の遺物として一の谷遺跡群では小形器台（241-36～38, 260-10等）が、延命遺跡では「茶臼山型」二重口縁壺（第298図1），有段高坏（229-164），小形器台（28-197, 36-295等），小形丸底土器（28-198）が一定程度出土している。量的な多さと共に、複数器種がセット関係で出土している点を重視したい。

山陰系の土器には、一の谷遺跡群より二重口縁壺や甕、鼓形器台（第299図）が出土しており、延命遺跡では大形鉢（第299図9）もみられる。量的に多数を占めるものではないが、複数器種が出土しており注意される。なお、いずれも胎土の面から在地での模倣形態と考えられる。また、観音寺市鹿隈前ノ原7号石棺墓周辺から小型の鼓形器台1点（第299図1）が採集されている<sup>(7)</sup>。小型の鼓形器台は山陰地域には希薄で、畿内を中心とした地域より少数出土例が知られている（中川1997）。本例も、受部外面に縦方向のミガキ調整が施され、また胎土の点からも、山陰地域以外の地域で製作された可能性が高い。

吉備系の土器は、いわゆる「ボウフラ」甕が一定量搬入されており、また若干の模倣形態も存在する。後掲する他の地域と比較すると、1遺跡あたりの搬入量はやや多く、一の谷遺跡では、遺物総量にもよるが15個体余が報告されている。

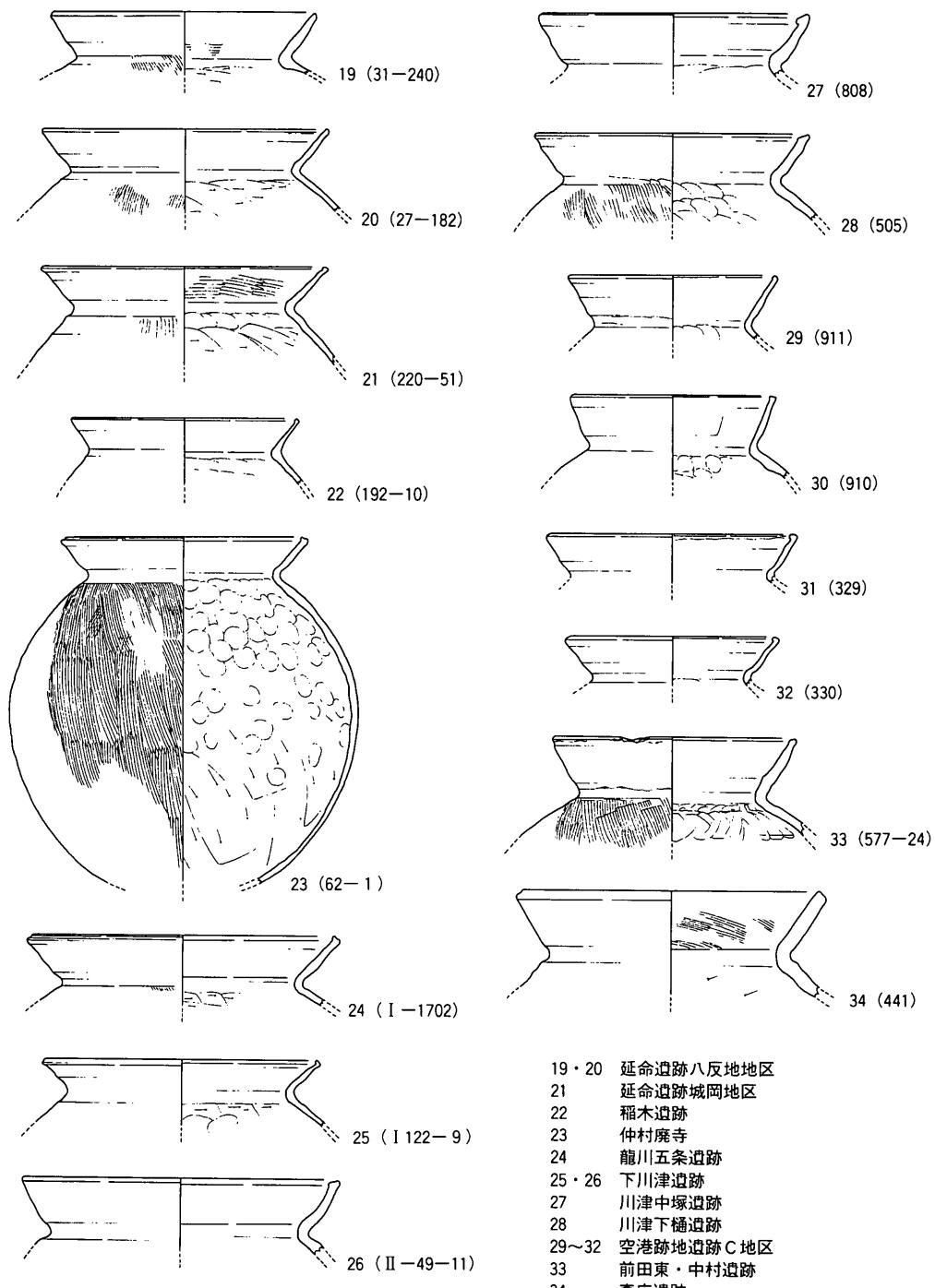
阿波系の土器は極めて乏しく、延命遺跡より片岩粒を含む二重口縁壺1点（第300図1）が搬入されているのみである。

#### 丸龜平野西部地域

夾雜物を多く含み良好な一括資料が乏しく、詳細は不明瞭な部分が多い。断片的な資料ながら、Ⅳ期の資料が仲村廃寺SH24・龍川五条遺跡SD07, Ⅶ期の資料が郡家田代遺跡SD35・龍川五条遺跡SH01等より出土している。

東四国系甕は、報告の絶対量は少ないものの、三条番ノ原遺跡（134），稻木遺跡（107-10, 113-71），仲村廃寺（62-1）に出土例がある。なお、稻木遺跡と仲村廃寺出土のものには、前章第2節で検討を行った黒雲母を多量に含む特殊な胎土が用いられており、本地域での製作を示唆する点で重要と考える。

一方、古式布留系甕は三豊地域と異なり極めて例外的な存在でしかない。仲村廃寺（第297図23）<sup>(8)</sup>や、TK217型式期の須恵器をも含むため確実な資料ではないが龍川五条遺跡（第297図24）に出土例がある。胎土の点から、搬入品ではなく在地での模倣形態と考えら



第297図 香川県内出土古式布留系甕 2  
 (各報告書より再トレース・一部改変、括弧内は報告書番号)

れる。その他畿内系土器には、同じく龍川五条遺跡より小形丸底土器（1697）が、道下遺跡より小形器台（35）がそれぞれ報告されている。

山陰系土器も、先の三豊地域には及ばないものの稻木遺跡（第299図10・11）に極微量が認められる。Ⅲ期を中心とした包含層資料ながら、二重口縁壺と小形甕が出土しており、特に後者は胎土こそ在地産だが、熟練した土器製作工人の移動を想起させる精巧な模倣形態である。

吉備系土器も、稻木遺跡を除けば、Ⅱ～Ⅲ期を中心に甕が1遺跡数個体程度搬入されるにとどまる。仲村廃寺（63-10）、彼ノ宗遺跡（88-6）、郡家原遺跡（44、50）、龍川五条遺跡（1696）よりそれぞれ出土している。一方稻木遺跡では、甕（123-90～92、143-28～30・33等）、高坏（115-111）、台付直口壺（121-35・125-155、252-164）と複数器種が搬入・模倣されており、また量的にもやや多量に搬入されており、他遺跡とは様相が大きく異なる。

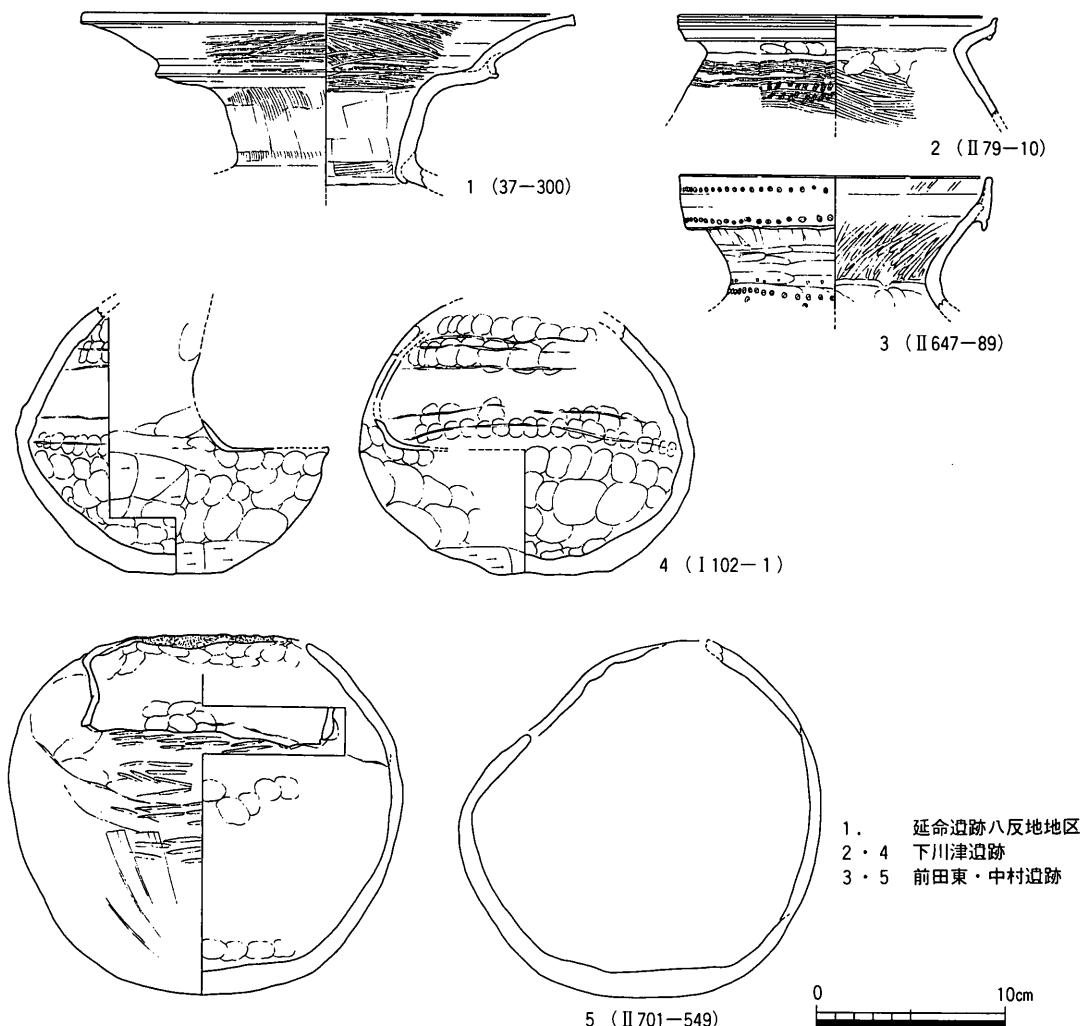
阿波系土器（第300図）もⅢ～Ⅳ期を中心に、龍川五条遺跡や道下遺跡より甕が、郡家原遺跡より広口壺がそれぞれ1個体搬入されている。阿波系土器は、量的に多数を占めるものではなく、遺物総量にもよるが、むしろ搬入をみない遺跡の方が多い。

### 丸亀平野東部地域

本地域も、良好な一括資料の提示は乏しい。Ⅳ期の資料が下川津遺跡SH II 32、V期の資料が川津中塚遺跡SD 07、川津下樋遺跡SD 24・川津二代取遺跡SD 05、Ⅶ期の資料が下川津遺跡SH II 02上層等より出土している。

東四国系甕は、Ⅲ～Ⅳ期の資料が下川津遺跡（I 87-25、I 119-10～13、II 48-14等）にみられ、V期の資料が川津中塚遺跡（23、24）、川津下樋遺跡（408、450等）、川津二代取遺跡（314～316等）より出土している。限られた小地域内ながら、V期段階で急速に遺跡数が増加する傾向が窺える。

本地域でも古式布留系甕は、主体的な存在ではない。Ⅳ～V期の資料が下川津遺跡、川津中塚遺跡、川津下樋遺跡（以上第297図）、川津二代取遺跡（413）よりそれぞれ最大数個体程度の出土が報告されているのみである。その他畿内系の土器には、下川津遺跡より手焙形土器（第298図4）や小形器台（I 122-12・13）が、川津中塚遺跡より小形器台（59）が出土している。また、近江系とされた下川津遺跡出土の甕（第298図2）は、口縁部下端に刺突文がなく、また胎土の面からも山城南部地域産の可能性が高い<sup>(8)</sup>。



第298図 香川県内出土畿内系土器  
(各報告書より再トレース・一部改変, 括弧内は報告書番号)

山陰系土器は、下川津遺跡より低脚杯（第299図12）の模倣形態が1点出土している。供伴遺物よりIV期に位置付けられる。

吉備系の土器は、下川津・川津中塚・川津下樋の各遺跡よりII～IV期を中心にボウフラ甕の搬入土器と模倣形態が少量出土しているが、目立った存在ではない。また、時期がやや遡る可能性は高いが、細頸壺や台付直口壺等の搬入・模倣土器が下川津遺跡（II 48-1・2）より少量出土している。

阿波系の土器は、下川津遺跡と川津中塚遺跡より二重口縁壺が各1点（第300図3・4）搬入されているのみである。

## 高松平野地域

資料数は他地域と比して恵まれてはいるが、良好な一括資料に乏しい点は他地域と変わらない。IV期の資料が中間西井坪遺跡谷7中・上層、六条・上所遺跡SK01、居石遺跡SR01、空港跡地遺跡SHc04・23等に、IV～V期の資料が空港跡地遺跡SHc05・07・09、VII期の資料が中間西井坪遺跡谷3等に、VII期の資料が空港跡地遺跡SDe137、前田東・中村遺跡C区SR02等に各々みられる。

東四国系甕は、III～IV期の資料が中間西井坪遺跡谷7中・上層より、IV期の資料が太田下・須川遺跡(210)、六条・上所遺跡(6)、前田東・中村遺跡(F202, G218等)より、IV～V期の資料が空港跡地遺跡(I512・514・741, II84・84・859等)より出土している。六条・上所遺跡出土のものは、胎土中に多量の黒雲母粒を含んでおり、前章2節で検討したように長尾平野東部域からの搬入の可能性がある。

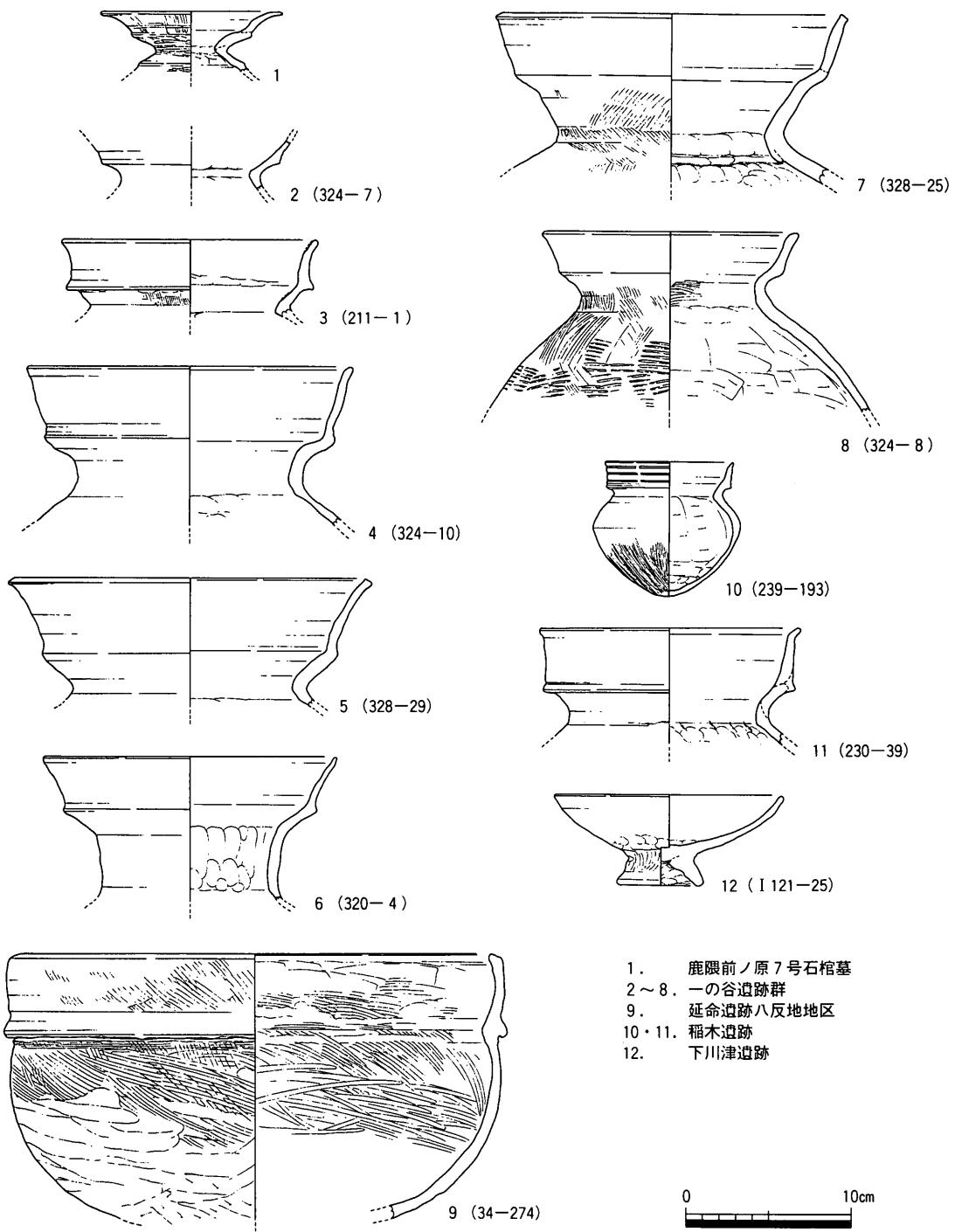
古式布留系甕は、極少量が模倣されているに過ぎない。空港跡地遺跡(第297図29～32)と前田東・中村遺跡(第297図33)が代表的なものである。いずれもIV期を中心とした時期に位置付けられよう。なお、前田東例は胎土中に黒雲母粒を多量に含んでおり、長尾平野東部域からの搬入の可能性がある。その他畿内系の土器として、中間西井坪遺跡より河内平野低地部産の甕や河内型庄内甕が、空港跡地遺跡で小形器台(I233・739)が、前田東・中村遺跡で小形器台(G526, 527等)や手焙形土器(第298図5)、伊勢系の口縁部に列点文を巡らせる加飾壺(第298図3)が出土している。また、前節に記述したように、空港跡地遺跡の前方後方形周溝墓より出土した直口壺(真下ほか1993)には東海系の影響が窺える。上記した遺物は、中間例を除いて時期を特定することは困難だが、概ねIV期を中心とする時期と考えておく。

布留系甕は、VII期の中間例で在地での導入・製作が指摘されるが、それが他地域にも普遍化できるかどうかは現状では不明。VII期の空港跡地や前田東例では、確実に普遍化は達成されているようだ。

山陰系土器は、僅かに中間西井坪遺跡谷7より鼓形器台の模倣形態が1点出土しているのみである。

吉備系土器は、中間西井坪・空港跡地の各遺跡でボウフラ甕の搬入土器と模倣形態が極少量出土しているのみである。特に前田東・中村遺跡でボウフラ甕が1点も報告されていない点は、吉備系土器の動向を端的に示していると考える。

阿波系土器の報告例も乏しい。空港跡地遺跡(第300図5・6)で広口壺と二重口縁壺



第299図 香川県内出土山陰系土器  
 (各報告書より再トレース・一部改変、括弧内は報告書番号)

が各1個体報告されているのみである。

### 長尾平野地域

本地域では調査例が少ないためもあり、資料数は乏しい。IV期の資料が森広遺跡S H208や鴨部南谷遺跡S R8901等に、VII期の資料が鴨部南谷遺跡S H8801にみられる。

東四国系甕は、IV期の資料が森広遺跡（191, 206~208等）と鴨部南谷遺跡（19-21・26, 26-1・3等）より、各々数個体程度が報告されている。遺物総量と比較すれば、量的にはやや多いと言えるだろう。なお、森広遺跡より出土した同種甕は、いずれも胎土中に多量の黒雲母粒を含み、長尾平野東部地域からの搬入品である可能性が高い。

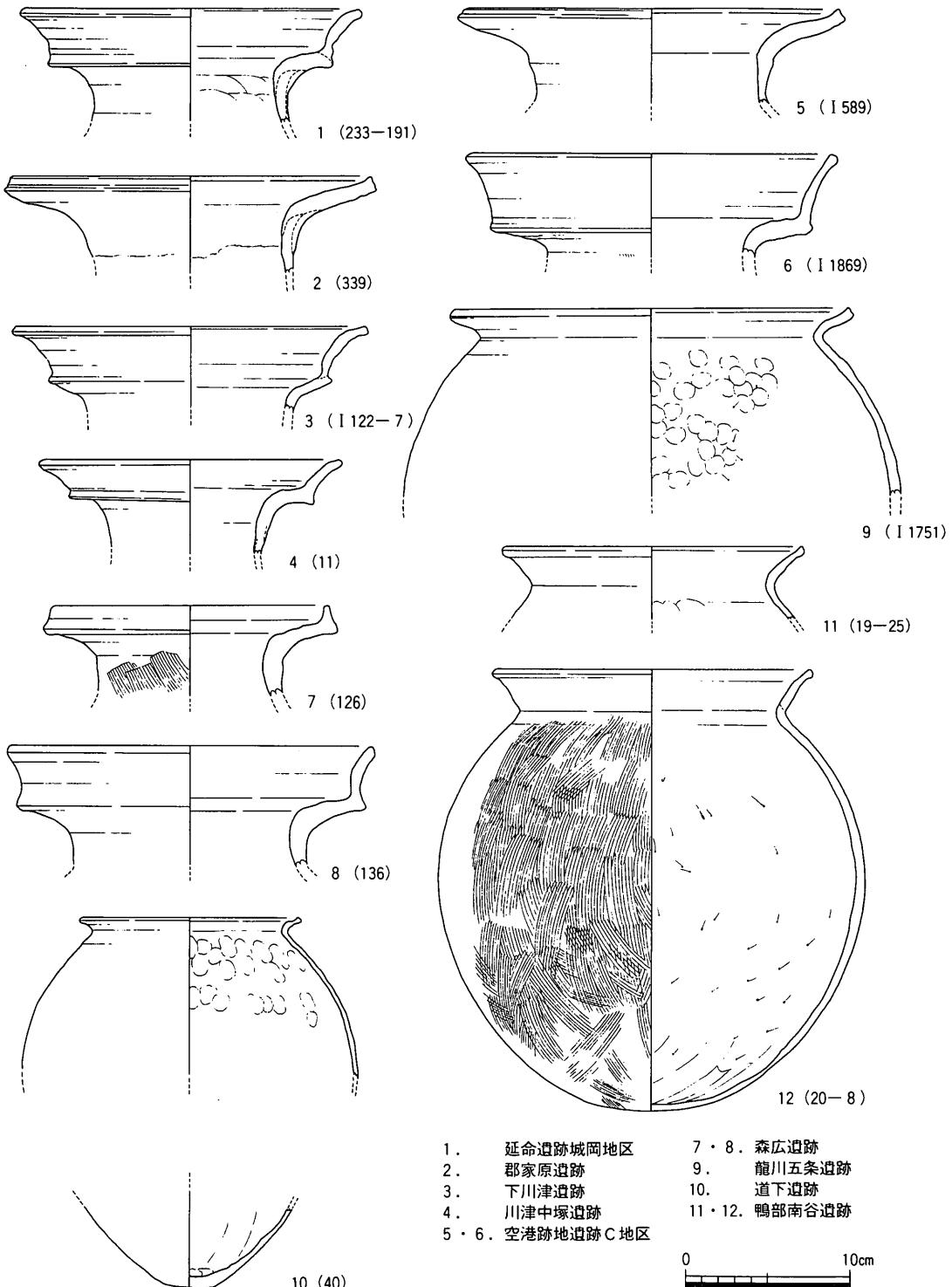
古式布留系甕の出土は極めて乏しい。確実なものとしては森広遺跡（441）より出土したものに限られる。資料数に制約が大きく、他地域と直接比較することは困難だが、今後の調査の進展によっても、こうした傾向が大きく変化することはないだろう。その他畿内系土器には、森広遺跡より小形器台（102, 364）が少量出土している。また、鴨部南谷遺跡より出土した直口壺（17-13, 23-2等）は、基本的には在地系譜の壺組成ではなく、畿内地域の影響を認める。

吉備系土器の出土も乏しく、僅かに鴨部南谷遺跡にボウフラ甕2点（19-16・17）が搬入されているのみである。その他弥生後期に遡るが、脚台（21-16）や台付壺（26-14）も吉備系の影響を認める。

阿波系土器（第300図）は、森広遺跡より広口壺と二重口縁壺が、鴨部南谷遺跡より甕等が、IV期を中心に出土している。資料数の絶対量からすれば他地域と比してやや多出傾向にあり、やはり地理的な要因によるところが大きいと思われる。

以上個別地域単位に、東四国系甕の動向と他地域系土器の搬入・模倣形態の様相について整理を行った。他地域系土器については、胎土や形態からその判断を行ったが、各遺跡の全ての土器を実見した訳ではないので、多くの遺漏があろうと思われる<sup>(10)</sup>。ここで示された様相が、どの程度実体を反映しているかどうかはなはだ心許ないが、形態的に明確な特徴を有するものについては、おおよそ網羅したのではないかと思われる。以下では、上記した様相のまとめを行い、若干の地域色の抽出を試みたい。

まず、東四国系甕は、量の多寡さえ問わなければほぼ各地域の遺跡より出土している。前述したように、IV期には既に各地域で普遍化を達成した可能性が高い。しかし、三豊地



第300図 香川県内出土阿波系搬入土器  
 (各報告書より再トレース・一部改変、括弧内は報告書番号)

域では、遺物総量に対する同種甕の占有率は著しく低く、またいすれも在地産の土器の胎土や色調とは異なることから、搬入品と考えられる。つまり、三豊地域では同種甕は、在地の土器組成の中に組み込まれておらず、搬入品として極少量が出土する可能性が高い。こうした傾向を三豊地域全域に普遍化できるかどうかは、資料数が僅少なため判断できないが、一応その可能性を認めておきたい。

こうしたⅣ期での同種甕の分布傾向は、前節で検討を行ったB類土器共有圏の広がりとほぼ合致する。そのことは、前項で検討したように、同種甕がB類甕を母体とすることからすれば至極当然のことなのだが、B類甕と東四国系甕の交替が、後者が前者を否定した上に成立するような劇的な変化ではなく、B類甕に代表される弥生時代の諸関係を多分に残しつつ穏やかに、しかし急速に移行したことを想像させる。

また、胎土の点では、丸亀平野西部地域と、高松平野東端の前田東・中村遺跡以東の各遺跡から出土した同種甕の多数には、共通して黒雲母粒が一定量含まれる特殊な素地粘土が選択されている。両地域は、直線距離でも30km以上離れており、採土地を同じくすることは考え難く、また一方の地域から他方の地域へ中間地域を経由せずに多量の土器が移動したとも考えがたいため、各々の地域で個別に土器の製作が行われた可能性が高い。そして、少なくとも成立当初にあっては、こうした胎土の特殊性から個別地域内の特定遺跡での集中的な製作と、地域内各遺跡への流通の可能性が示唆される。

こうしたⅣ期での東四国系甕の拡散傾向は、Ⅴ期の遺跡が乏しい丸亀平野西部及び長尾平野地域は不詳ながら<sup>(11)</sup>、基本的にはⅤ期へそのまま継続されると考える。上記地域においては今後の調査の進展による資料の増加を期待したい。なお、Ⅳ期段階で同種甕以外の主要器種のいくつかを欠落する地域でも、Ⅴ期段階になると器種の装備が進展する可能性が高い。

次に、布留系甕は、三豊地域と丸亀平野西部以東の各地域で、その分布傾向に大きな相違を認める。布留系甕の出現時期は、各地域においてⅣ期段階には確実に認められ、周辺諸地域と比較して大きく立ち遅れることはない。しかし、丸亀平野以東の各地域では、布留系甕は1遺跡で多くて数個体程度が模倣されているに過ぎず、おそらくその占有率は百分比で示せる数量ではない。また、その他布留系土器群では、小形器台と小形丸底土器が極少量伴うのみである。これに対して三豊地域では布留系甕は、例えば一の谷遺跡群では報告書に掲載された甕の中での占有率は約2割に達する。吉備系甕も同様に1割程度認められ、これに山陰系甕等を合わせた非在地系統甕の占有率は3割程度に達する。その他布

留系土器群も、延命遺跡で「茶臼山型」二重口縁壺が出土しているほか、有段高杯や小形器台、小形丸底土器の出現頻度も丸龜平野以東の各地域と比較すると明確に高い傾向にある。

しかし、本来小形器台の上に載せられていたであろう小形丸底土器や小形丸底鉢は、小形器台に比較すれば、その出現頻度が乏しい点は否めない。小形器台には、主に在地系譜の小形鉢などが載せられていたのである。つまり、小形三種土器はセット関係を有して在地の土器組成の中に取り込まれたのではなく、本来在地の組成に存在していなかった小形器台のみを主に採用し、他の小形土器群は在地系譜のもので代用したと考えられる。ここには、小形三種土器が本来有するイデオロギー的側面は希薄であり、特定器形の選択的採用にとどまった可能性が高い。こうした様相は、布留系壺の多様性と共に、畿内系土器群を製作していた集団の直接的な移動を背景としているのではなく、移動地周辺域への2次の波及の可能性を端的に示しているものと考えられる。

山陰系土器も、布留系土器の動向と酷似し、IV期以降に出現する。三豊地域では、二重口縁壺、壺、鼓形器台、大型鉢といった複数器種が一定量模倣されている。しかし、丸龜平野以東の各地域では僅かに稻木遺跡と中間西井坪遺跡等で、二重口縁壺、小形壺、鼓形器台、低脚杯が極少量出土しているに過ぎず、在地の土器組成に影響を与えるようなものではない。

吉備系土器は、弥生時代後期以降量的には限られるが各遺跡で普遍的に搬入されており、その傾向はIV期以降も大きな変化は認めない。しかし、三豊地域では丸龜平野以東の各地域と比較すると、相対的に多出傾向にある点は注意しておきたい。

こうした山陰系あるいは吉備系土器の動向は、布留系壺の成立に吉備及び山陰系壺が大きく関与したこと（寺沢1986・次山1995）と無関係ではないだろう。布留系土器群の拡散には、畿内地域の集団以外にも、吉備や山陰、北部九州地域の諸集団の関与の可能性が想定されている。

一方阿波系土器は、各地域で大きな差異を認めない。III～IV期段階で、広口壺や二重口縁壺といった壺形態を中心に、若干量の搬入例を認める。やや、丸龜平野以東の地域で多出する傾向があるが、現状で量的な格差を見出すまでには至らない。おそらく弥生時代後期以降、継続して一定量が搬入されていると考えられ、その傾向はIV期以降にも大きく変化はしないものと考えられる。

以上の点から、三豊地域と丸亀平野以東の各地域間で、Ⅳ期段階において非在地系統の土器の流入の明確な相違が存在することが明らかとなった。つまり、三豊地域では、布留系甕を中心に山陰系土器群や吉備系甕の搬入・模倣が顕著であり、甕形態における外来系土器への依存は3割程度に達する可能性がある。一方丸亀平野以東の地域では、東四国系甕が一定量を占め、甕形態のみならず布留系土器群を含めた外来系土器の流入は極めて例外的な存在に限られる。

こうした両地域での土器様相の相違は、前期前方後円墳の分布の相違とも合致し興味深い。つまり、三豊地域では現状で前期前方後円墳は皆無であり、今後の調査例の増加によっても、丸亀平野以東の地域との分布の格差は到底埋まりそうにない。こうした前方後円墳分布の偏在性を評価すれば、布留系甕と前方後円墳の分布との間に明確な相関関係を認めることは可能であり、両地域の集団の政治的な枠組みが異なっていたと考えることは許されよう。しかし、布留系土器の多寡が直接的に「初期ヤマト政権中枢との政治的関係性」(寺沢1987)と相関するかどうかは疑問が残る。例えば、三豊地域唯一の前期古墳である鹿隈罐子塚古墳では、埋葬施設に北部九州色の強い竪穴石槨が採用されており、布留系や山陰系土器群の流入が、北部九州ないしは西部瀬戸内を媒介としたものであった可能性も考えられる。三豊地域での布留系甕の評価については、隣接する伊予東部地域や備後地域との関係も考慮せねばならず、いずれ機会を改めて言及することとしよう。

さて、一方で東四国系甕を共有した集団は、畿内や吉備、三豊地域を含めた西部瀬戸内地域といった周辺諸地域に対抗する必要上、極めて強固な連帶性が要求されたと想像される。繰り返し述べてきたように、そのことが東四国系土器群といった独自の土器様式を創出し、地域色の豊かな前方後円墳を創出した背景となったと理解される。こうした諸点に、自己のアイデンティティーの表出を求めたのであろう。本地域に特徴的な積石塚古墳に、未だに三角縁神獣鏡が一面も出土していない点も、畿内地域との関係性をネガティブに示していると考える。

## 6. 東四国系土器群の終焉

上記したように、讃岐と阿波の中枢域の強固な連帶性を象徴する土器群として成立した東四国系土器群であったが、意外にその終焉は迅速である。

少なくともⅦ期段階には、讃岐中枢域の一角（中間西井坪遺跡谷3等）に、布留系土器群と山陰系土器群で装備された畿内系土器製作集団が出現している。極めて整ったセット

関係を有することからすれば、当該遺跡での状況は畿内地域からの一定数の人間の直接的な移住を背景とする可能性が高い。中間遺跡での様相の普遍化については、当該期の遺跡数が限られるため不詳である。さらに当該遺跡が、埴輪や土製棺の製作遺跡である特殊性を考慮すれば、布留系土器の普遍化が東四国系土器の共有集団内部で大きく進展していたことを証するものとはなりえないだろう。

こうした状況もⅧ期段階には、鴨部南谷遺跡、空港跡地遺跡、下川津遺跡、郡家田代遺跡、龍川五条遺跡等で布留系土器群の出土が確認され、なお遺跡数が乏しい点は否めないが、讃岐諸地域で普遍化を達成するとみてよい。当該段階には東四国系土器群は、その残滓さえも認めず払拭される。

ⅦからⅧ期段階にかけての布留系土器群の拡散と呼応して、前方後円墳の築造は急速に衰退する。第301図に示したように、讃岐諸地域における前方後円墳の築造は、Ⅳ～Ⅵ期をピークとして急速にその築造数を減少させる。また、阿波・讃岐地域に多い墳長20m前後的小規模な前方後円墳は、Ⅵ期以降にはほぼその築造が終焉する可能性が高い。つまり、Ⅵ期を境に前方後円墳の築造は、何らかの規制を受け数系列程度に淘汰・再編される傾向があり、Ⅶ～Ⅷ期にかけてそうした傾向は徐々に強まる様相がみられる。地域によって若干の遅速はあるが、Ⅷ期段階で確実に前方後円墳を築造しているのは、津田湾周辺（ければ

	大内	寒川	三木山田	香川	阿野	鵜多	那珂多度
Ⅱ～Ⅲ期				20			
Ⅳ期		2 3 4 5		21	32 33 38 39	48	
Ⅴ期		6 7 8 9	15 16 17	22 23 24	34 35 36	40 41 42 43	49 50 51 52
Ⅵ期	1	10 11 18	25 26 27	37	44 45 53 54 55 56		
Ⅶ期		12	19	28 29		46	57
Ⅷ期		13		30			58
Ⅸ期		14		31		47	59

1. 大日山古墳
2. 鵜ノ部山古墳
3. 奥3号墳
4. 丸井古墳
5. 稲荷山古墳
6. 奥14号墳
7. 古古墳
8. 川東古墳
9. 中代古墳
10. 赤山古墳
11. 奥13号墳
12. 岩崎山4号墳
13. けば山古墳
14. 富田茶臼山古墳
15. 高松茶臼山古墳
16. 犀山1号墳
17. 池戸八幡神社1号墳
18. 長崎鼻古墳
19. 三谷石舟古墳
20. 鶴尾神社4号墳
21. 摺鉢谷9号墳
22. 猫塚古墳
23. 姫塚古墳
24. 北大塚古墳
25. 鏡塚古墳
26. 稲荷山姫塚古墳
27. 船岡山古墳
28. 横立山経塚古墳
29. 石船塚古墳
30. 今岡古墳
31. がめ塚古墳
32. ハカリゴーロ古墳
33. 離山2号墳
34. 六ツ目古墳
35. 白砂古墳
36. 爺ヶ松古墳
37. タイバイ山古墳
38. 横山徑塚1号墳
39. 石塚山3号墳
40. 横山徑塚2号墳
41. 奥川内2号墳
42. 吉岡神社古墳
43. 石塚山1号墳
44. 快天山古墳
45. 陣の丸1号墳
46. 陣の丸2号墳
47. 田尾茶臼山古墳
48. 大麻山挽貸塚古墳
49. 大麻山徑塚古墳
50. 野田院古墳
51. 鶴ヶ峰4号墳
52. 丸山2号墳
53. 大窪徑塚古墳
54. 鶴ヶ峰2号墳
55. 丸山1号墳
56. 磨臼山古墳
57. 御産鹽山古墳
58. 北向八幡社古墳
59. 菊塚古墳

第301図 讃岐地域前方後円墳編年案

山古墳）と高松平野西部域（今岡古墳），丸亀平野西部域（菊塚古墳？）等の数系列に限定される可能性が高い。そこにはなお，前方後円墳の築造に際して讃岐地域特有の前記した地域色の残存を認める系列もあるが，同時に東四国系土器群の供献の衰退と，円筒埴輪の樹立の盛行といった畿内的な墳墓祭祀の浸透をも合わせ持つものである。

こうした布留系土器群の淘汰と，在地色の強い前方後円墳の衰退といった次元の異なる現象を，短絡的に関連付けて扱うことは慎まなければならないだろう。しかし，前節以降の検討を踏まえ，また極めて相関的な関係にあるこうした現象を，ここでは畿内系勢力の伸張といった視点で捉えようと考える。土器様式と前方後円墳の諸属性に顕現された，阿波・讃岐地域の自立性は，Ⅶ～Ⅷ期段階にかけて大きくその方向性が修正されたと考える。しかし，その具体相については，四国系土器群の衰退期であるⅤ～Ⅵ期の遺跡数が乏しく，ここではその詳細を語ることはできない。

一方，布留系土器群は，極微量ではあるが東四国系土器群分布圏内においても，Ⅳ期以降には確実に搬入もしくは在地で模倣形態が製作されている。また，東四国系甕の成立に，古式布留系甕の影響が認められる可能性について上記した。阿波・讃岐における自立性は，必ずしも畿内や周辺諸地域との関係性を否定した上に成立したものではない。畿内地域からのインパクトは，断続的ながらも地域内の諸古墳において認められ，在地の古墳の展開に多様性をもたらす要因となっている。例えば阿波中枢域では，おそらくⅢ期に位置付けられる奥谷2号墳で，積石塚が採用され讃岐地域との親縁性がみられるが，続くⅣ期の段階では，複数面の三角縁神獣鏡を副葬し，畿内的な立地や墳形を呈する宮谷古墳が突如として築造される。しかし，宮谷古墳にみられた強烈な畿内的様相も，後出する古墳には継承されず，極めて一過性の高いもので終始する。讃岐中枢域での，空港跡地遺跡S T05の前方後方形墳墓の築造（真下ほか1993）も同様な現象の一例として理解すべきであろう。

また，讃岐津田湾周辺では，Ⅳ期段階に積石塚古墳の鵜の部山古墳が築造されるが，讃岐諸地域に先駆けてⅦ期段階の岩崎山4号墳で畿内色が強い前方後円墳が築造され，その様相はⅧ期のけば山古墳へと継承される（大久保・藏本1997）。

東四国系土器群と積石塚古墳という，強烈な個性をもって周辺諸地域に対峙した阿讃連合体も，極めて短期間の内にその自立性を喪失し，徐々に畿内地域との融合化の途を模索し始める。その大きな画期をⅦ期における，中間西井坪遺跡への布留系土器群の流入に求めたい。

以上、阿波・讃岐地域の古墳出現期の様相について、土器様相と古墳の動向を中心に極めて荒削りな考察を試みてきた。また、検討した論旨は多岐に亘り、まとまりの乏しい内容となってしまった。論じ残した点も少なくない。いずれ機会を改めて、再度上記した課題に取り組みたいと考える。

註1. 木下氏は、本稿で東四国系土器群と捉える土器群のうちの一部について、「下川津C類土器」という名称を提唱されている。「下川津C類土器」は、多量の火山ガラスを含有する特殊な素地粘土が選択され、また「東阿波型土器」として報告される土器群の中の「壺」と「甕」と酷似する形態・製作技法をもつものを含む反面、「東阿波型土器」には認められないタイプの「高壺」・「小型丸底壺」が含まれていることが指摘でき、形態や技法のうえでも一群の土器として把握することができる」ことを、主な指標とする。しかしながら、これら土器群の系譜関係については明言されておらず、「形態や技法のうえでも一群の土器として把握」できることの説明も充分なされているとは言い切れない。以上の理由から、私は「下川津C類土器」という呼称の使用を控える。

また、菅原氏は下川津B類土器と東阿波型土器群を総称して「東四国土器群」という呼称を使用されている（菅原1992b）。「四国系」あるいは「東部四国系」という名称は、菅原氏に限らず散見されるようになってきた。しかし、下川津B類土器についていえば、前節でも検討したように、同種土器はあくまで高松平野中枢部でのみ製作された土器群であり、讃岐周辺諸地域には搬入品として出土するものである。東阿波型土器については詳細を知り得ないが、上記の点から「東四国土器群」という名称は用語として誤解を生じかねない難点がある。私の称する「東四国系土器群」は、詳細は本文に拠られたいが、これらとはややニュアンスを異にする土器群を指すことを強調しておきたい。

註2. 例えば、大東川下流域の川津中塚・川津下樋・川津二代取の各遺跡から出土した同種土器群には、胎土中に火山ガラスが多量に混入した特徴的な素地粘土が採用されている。また、同様に森広遺跡や稻木遺跡・仲村廃寺遺跡出土例では、黒雲母の多量混入が確認された。こうした特殊な胎土の採用は、粘土採取地の限定と共に特定集団での專業的な製作の可能性を推測させる。

註3. IV期のB類複合口縁壺として、龍野市新宮東山古墳群3号棺（岸本1996）と神戸市玉津田中遺跡S D54001（多賀ほか1995）を挙げておく。

註4. 近年、県東部に位置する大川郡大内町住屋遺跡より、IV期に位置付けられる東四国系甕の出土が確認された。調査を担当された小野秀幸氏のご教示による。

註5. 濑戸内海歴史民俗資料館所蔵。今回、同館のご厚意により、資料を観察する機会を与えて頂き、また本書への掲載をご許可頂いた。資料調査時には、様々なご助力・ご教示を頂いた松本豊胤氏、真鍋篤行氏に記して感謝いたします。

なお、同古墳出土の東四国系甕（第295図3・4）については、川津二代取遺跡S D05や大阪府萱振遺跡S E03（図版第36-42、大野1983）出土資料との比較から、布留1式併行期に位置付けられるものと考える。

註6. 1997年の善通寺市教育委員会の調査によって、V期に位置付けられる東四国系甕の出土が確認された。同市教育委員会笹川龍一氏には、調査中にも関わらず資料を実見する機会を与えて頂

いた。記して感謝いたします。

註7. 観音寺市教育委員会所蔵。同教育委員会のご厚意により、今回資料を観察する機会を与えて頂いた。資料調査時には、久保田昇三氏より様々なご助力・ご教示を得た。記して感謝いたします。

註8. 善通寺市教育委員会所蔵。仲村庵寺SH24出土の布留系甕は、筆者に実見によれば、口縁部の形状（法量・端部形状等）や体部の調整手法、胎土（布留系甕には黒雲母の含有は乏しく、東四国系甕には多量の黒雲母が含有される）等あらゆる点において微妙に異なる、接合関係にはない別個体の土器が図面上で接合復元され、図示されている。その別個体とは、東四国系甕である。図示した布留系甕は、今回実測作業を行い掲載したものである。

今回、同教育委員会のご厚意により、資料を観察する機会を与えていただき、また本書への掲載をご許可頂いた。資料調査時には、 笹川龍一氏より様々なご助力・ご教示を得た。記して感謝いたします。

註9. 森岡秀人氏のご教示による。

註10. 例えば、太田下・須川遺跡では、弥生時代後期中葉を前後する時期の4点の阿波系搬入土器が報告されている（奥田1995）。しかし、土器の形態は、当該期の本地域の土器と明確な差異に乏しく、形態からこれらの土器を阿波系として抽出することは至難である。近隣地域の搬入土器について確度の高い議論をしようとすれば、このように全ての土器について詳細な胎土の観察を行う必要がある。今回の検討ではそこまでの作業は行えておらず、阿波系土器の搬入量については今後の検討によって増加する可能性は高い。

註11. 丸龜平野西部野田の院古墳より、V期に位置付けられる東四国系甕の出土が知られるのみ。集落の様相については、不詳な点が多い。

## 引用・参考文献

- 赤塚次郎 1990『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 回間遺跡』 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994「3・4世紀の東海地域」『東日本の古墳の出現』 山川出版社
- 秋山忠ほか 1980『仁尾町・南草木遺跡調査報告』 香川県教育委員会
- 池橋幹 1985「弥生後期土器の地域性とその背景 一中国地方東部を中心に一」『考古学研究 第32巻第3号』
- 石井健一 1998『三木町内遺跡発掘調査報告書 西浦谷遺跡』 三木町教育委員会
- 石野博信 1988「古墳前期の薄甕と厚甕」『網干善教先生華甲記念 考古学論集』
- 一瀬和夫 1989「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『大阪文化財論集 一財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集』
- 一山典 1983「徳島県奥谷2号墳」『日本考古学年報33 1980年版』 日本考古学協会
- 井上裕弘 1991「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『古文化論叢児嶋隆人先生喜寿記念論集』
- 岩崎直也 1984「四国系土器群の搬出」『大阪文化誌 第17号』
- 宇垣匡雅 1995「大和王権と吉備地域」『古代王権と交流6 濑戸内海地域における交流の展開』 名著出版
- 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』 香川県教育委員会他
- 大久保徹也 1993「讃岐地方における古墳時代初期の土器について 一下川津VI式以降の様相」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』
- 大久保徹也 1995「上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』 香川県教育委員会他
- 大久保徹也ほか 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』 香川県教育委員会他
- 大久保徹也 1996a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会他
- 大久保徹也 1996b「各地域における弥生時代後期土器の様相 一讃岐一」『古代学協会四国支部第10回松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』
- 大久保徹也 1997「」『第16回庄内式土器研究会 「庄内併行期の古墳出土土器」発表資料』
- 大久保徹也・蔵本晋司 1997「香川県における前方後円墳の再検討作業」『中四研だより 第6号』 中国四国前方後円墳研究会
- 大野薰 1983『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会
- 奥田尚 1995「太田下・須川遺跡の土器の砂礫」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊』 香川県教育委員会他
- 片桐節子 1992『平岡遺跡群発掘調査報告書』 大野原町教育委員会
- 片桐孝浩 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 延命遺跡』 香川県教育委員会他
- 片桐孝浩 1992『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第11冊 三条番ノ原遺跡』 香川県教育委員会他
- 片桐孝浩ほか 1994『県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 小山・南谷

- 遺跡 平成5年度』 香川県教育委員会他
- 片桐孝浩 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第21冊 川津下樋遺跡』 香川県教育委員会他
- 片桐孝浩ほか 1997『中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』 香川県教育委員会他
- 亀田隆之 1973「八世紀における律令国家の用水支配」『日本古代用水史の研究』 吉川弘文館  
観音寺市誌増補改訂版編集委員会編 1985『観音寺市誌（通史編）』
- 岸本道昭 1996『龍野市文化財調査報告16 新宮東山古墳群』 龍野市教育委員会
- 北山健一郎ほか 1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 太田下・須川遺跡』 香川県教育委員会他
- 北山健一郎ほか 1998『高松港頭土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9年度 西打遺跡』 香川県教育委員会他
- 木下晴一 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊 川津二代取遺跡』 香川県教育委員会他
- 藏本晋司 1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第4号
- 藏本晋司 1997『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 空港跡地遺跡II』 香川県教育委員会他
- 國木健司 1990『鴨部南谷遺跡発掘調査概報』 志度町教育委員会
- 國木健司 1993『石塚山古墳群』 綾歌町教育委員会
- 近藤玲 1996「各地域における弥生時代後期土器の様相 一阿波一」『古代学協会四国支部第10回松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海』
- 笹川龍一 1985『彼ノ宗遺跡』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1988『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団他
- 笹川龍一 1989『仲村廃寺』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一 1993『永井遺跡発掘調査報告書』 善通寺市埋蔵文化財発掘調査団
- 笹川龍一 1995『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書』 善通寺市教育委員会
- 佐々木憲一 1995「地域間交流の考古学—最近の欧米における動向—」『展望考古学』
- 佐々木憲一 1997「日本考古学における中位理論 一弥生・古墳時代の地域間交流論を素材にして一」『古代』第104号
- 佐藤竜馬ほか 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第24冊 郡家田代遺跡』 香川県教育委員会他
- 芝香寿人ほか 1997『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』 御津町教育委員会
- 菅原康夫ほか 1983『萩原墳墓群 一鳴門市大麻町所在一』 徳島県教育委員会
- 菅原康夫 1987『黒谷川郡頭遺跡II』 徳島県教育委員会
- 菅原康夫ほか 1989『黒谷川郡頭遺跡III・IV』 徳島県教育委員会
- 菅原康夫 1992a「阿波弥生時代終末期社会の特質」『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』
- 菅原康夫 1992b「保持具から型へ」『真朱 創刊号』 財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 善通寺市ほか 1986『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 昭和61年度』
- 高橋護 1988「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告9』 岡山県立博物館
- 多賀茂治ほか 1995『兵庫県文化財調査報告第135-3冊 玉津田中遺跡 第3分冊』 兵庫県教育

## 委員会

- 田崎博之 1995 「瀬戸内における弥生時代社会と交流 一土器と鏡を中心として一」 『古代王権と交流 6 瀬戸内海地域における交流の展開』 名著出版
- 次山淳 1995 「波状文と列点文 一布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布一」 『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢Ⅱ』
- 都出比呂志 1989 「地域圏と交易圏」 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱」 『日本史研究 343号』
- 寺沢薰 1986 「畿内古式土師器の編年と二, 三の問題」 『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 矢部遺跡』 奈良県教育委員会
- 寺沢薰 1987 「布留0式土器拡散論」 『同志社大学考古学シリーズⅢ 考古学と地域文化』
- 中川寧 1997 「いわゆる「山陰系土器」についての若干の考察 一古墳時代初頭に見られる小型の鼓形器台を中心にして一」 『立命館大学考古学論集Ⅰ』
- 西岡達哉ほか 1989 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 稲木遺跡』 香川県教育委員会他
- 西岡達哉ほか 1990 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 一の谷遺跡群』 香川県教育委員会他
- 西岡達哉ほか 1994 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第14冊 川津中塚遺跡』 香川県教育委員会他
- 西岡達哉ほか 1995 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第15冊 龍川四条遺跡』 香川県教育委員会他
- 西岡達哉 1996 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 空港跡地遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会他
- 西村尋文ほか 1997 『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成8年度 原中村遺跡』 香川県教育委員会他
- 櫛宜田佳男 1998 「石器から鉄器へ」 『古代国家はこうして生まれた』 角川書店
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」 『前方後円墳集成 中国・四国編』 山川出版社
- 廣瀬常雄 1994 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊 金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡』 香川県教育委員会他
- 廣瀬常雄 1995 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第17冊 郡家大林上遺跡』 香川県教育委員会他
- 藤好史郎ほか 1990 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』 香川県教育委員会他
- 古野徳久 1998 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡Ⅱ』 香川県教育委員会他
- 真下拓也ほか 1993 『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成4年度』 香川県教育委員会他
- 松下勝 1990 「播磨のなかの四国系土器」 『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』
- 宮崎哲治 1991 『県道多度津丸亀線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 道下遺跡』 香川県教育委員会他
- 宮崎哲治 1993 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城遺跡』 香川県教育委員会他
- 宮崎哲治 1996 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第23冊 龍川五条遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会他

- 森格也ほか 1995 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 前田東・中村遺跡』 香川県教育委員会他
- 森岡秀人 1991 「土師器の移動」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』 雄山閣出版株式会社
- 森岡秀人 1998 「年代論と邪馬台国論争」『古代史の論点4 権力と国家と戦争』 小学館
- 森下英治 1994 『旧練兵場遺跡 一平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告一』 香川県教育委員会
- 森下英治 1995 『旧練兵場遺跡Ⅱ 一平成6年度四国農業試験場内発掘調査報告一』 香川県教育委員会
- 森下英治 1997 a 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第27冊 三条黒島遺跡・川西北七条Ⅰ遺跡』 香川県教育委員会他
- 森下英治 1997 b 『丸亀平野条里型地割の考古学的検討』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V』
- 森下友子 1995 「胎土1類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 太田下・須川遺跡』 香川県教育委員会他
- 山下平重ほか 1993 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第13冊 郡家原遺跡』 香川県教育委員会他
- 山下平重 1997 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ』 香川県教育委員会他
- 山本一伸ほか 1997 『大型店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 森広遺跡』 寒川町教育委員会
- 山本英之ほか 1997 『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡』 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1994 a 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二冊 浴・松ノ木遺跡』 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1994 b 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊 浴・長池Ⅱ遺跡』 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1995 a 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四冊 井手東Ⅰ遺跡』 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1995 b 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第六冊 蛙股遺跡』 高松市教育委員会他
- 山元敏裕ほか 1995 c 『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第七冊 居石遺跡』 高松市教育委員会他
- 米田敏幸 1985 「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集』 考古学を学ぶ会